神社と四季「初日の出」

広島県神社庁報
二葉（ふたば）
第155号
発行所 広島県神社庁
広島市東区二葉の里
☎(082)261-0563
FAX(082)261-6628

謹賀新年

広島県神社庁長　吉川通泰

年頭に際し、皇室国家の御隆昌と各御社頭のご清栄を寿ぎ奉り関係各位のご多幸をお祈り申し上げます。

本宗と仰ぐ、伊勢の神宮におかれましては、いよいよ第六十三回式年遷宮の諸行事が始まります。

御遷宮は、国家の重儀として千三百年の間、御歴代の聖旨を奉戴し「皇家（こうか）第一の重事、神宮無双の大営（だいえい）」と称し、先人が努力に努力を重ね多くの困難を排し国家を挙げ斎行され、国家国民の平安を祈り続けて、現代に日本民族の精神と古代の技を伝え、さらには神宮が新しくなることで、国全体が若返り、常に命を更新して永遠を保つとの日本のこころを継承して参りました。

令和十五年秋の遷御に向け、大御心を戴き、神社関係者一致結束し広く奉賛活動を展開してまいりたく、皆さまのご支援ご奉賛の程切にお願い申し上げます。

本庁の諸施策の実施、県下神社関係の事務を掌理する二葉の里の庁舎も経年劣化が進み、今般速谷神社の境内を貸与戴き新庁舎の建設が決定いたしました。できるだけ経費を抑え、災害に強く耐震にも優れ、時代に即した庁舎としてまいりたく何卒お力添えを賜りますよう重ねてお願い申し上げる次第です。

巳の歳は脱皮を繰り返し過去の経験を活かしながら成長を継続する年と言われています。先人の足跡を振り返りつつ歩みを進めてまいる所存です。本年も神社庁の諸施策にご理解ご協力の程お願い申し上げご挨拶といたします。

乙巳（きのとみ）年について

蛇はその長い奇形な形、好んで沼沢などに出没すること、強い生命力と繁殖力などによって人々の想像力を刺激し、様々な説話や俗信を生みました。世界的に見ても、その脱皮現象などにより、永生・不死の信仰との結びつきがあります。

日本では民間信仰において神霊を蛇の姿に考える例が多くあります。水の神は一般に竜蛇と考えられ、池や沼の主を蛇体とし、蛇が弁財天の神使ともされています。山の神や雷神を蛇体とする例も少なくありません。当広島県に於いても特殊神事や神楽に藁蛇が用いられる例が多くあります。

蛇に関する神話としては八俣の大蛇や、三輪山の神（大物主神）と倭迹迹日百襲姫（やまとととひもも そひめ）命の結婚の話が挙げられます。古語で蛇をチと呼び、チは血・乳・気などと同じく生命力あるもの、生命を育てる力を持つもの、霊あるものとみなされたものを呼ぶ言葉とされています。

他にも様々な俗信があり、家や屋敷内に蛇がいたり、蛇の夢を見ると金持ちになる、蛇がとぐろを巻いているのを見るのは吉兆であるなどとも言われています。

非公表

非公表

新庁舎の建築コンセプトと魅力

国立大学法人 福井大学 講師（専任）
河内神社 禰宜（文化財学・一級建築士） 山田岳晴

廿日市市の速谷神社境内に計画されている広島県神社庁新庁舎の建築基本設計を担当しました。そのコンセプトと特長をお伝えします。

◆新庁舎のコンセプト

安全性などの大前提はもちろんのこと、新しい庁舎に求められる機能を盛り込みました。基本となるコンセプトは、

①関係者誰もが利用したくなる現代空間
②運営・事務・保存など使いやすい環境
③伝統と構造を活かした品格ある造形美

とし、魅力を発揮できるよう設計しました。

◆規模形式

建築面積は約三八〇㎡、延べ面積は約七七〇㎡、三階建て（屋根裏収納庫を含む）、高さ約十mです。構造は鉄骨造とし、今後の維持の容易性も確保しています。屋根は入母屋造平入で、日本建築ならではの柱を見せた外観とし、高床の家屋を思わせる暖かみのある佇まいになっています。

◆一階

正面の車寄せから入ると、大きな玄関ホールがあり、広い階段が二階へと誘います。

玄関ホール右手には事務室があり、機能的に用務が行えます。その奥には応接室と庁長室があります。さらに裏通路を介して、大きな書庫があり、現在の庁舎で分散保管されている倍の量の資料が一か所で保存できます。

中央のホールの左手には、ホールから繋がる板敷きの広い研修室があります。ご神殿や和室も配置され、可動壁でホールと仕切って祭式などの研修にも使えるようになっています。

中央奥には、洋式の御手洗があります。

◆二階

中央の階段を上がると、二階はホワイエ（休憩や社交に使われる幅のある空間）が広がります。ホワイエには南東に向けて眺望が開けたカウンター席が並び、訪問者の語らいの場となります。

ホワイエに面してガラス張りの開架書庫があり、図書が気軽に閲覧できます。

右手前方には小会議室があり、十五人程度までの打合せができます。また、投影機などを利用して、現代社会で必須になりつつあるオンライン会議も可能です。

右手後方には八畳、九畳の和室があり、研修時の着替えや控え室などに利用できます。また、給湯所やシャワー設備もあり、お茶出しや非常時の活用も期待できます。

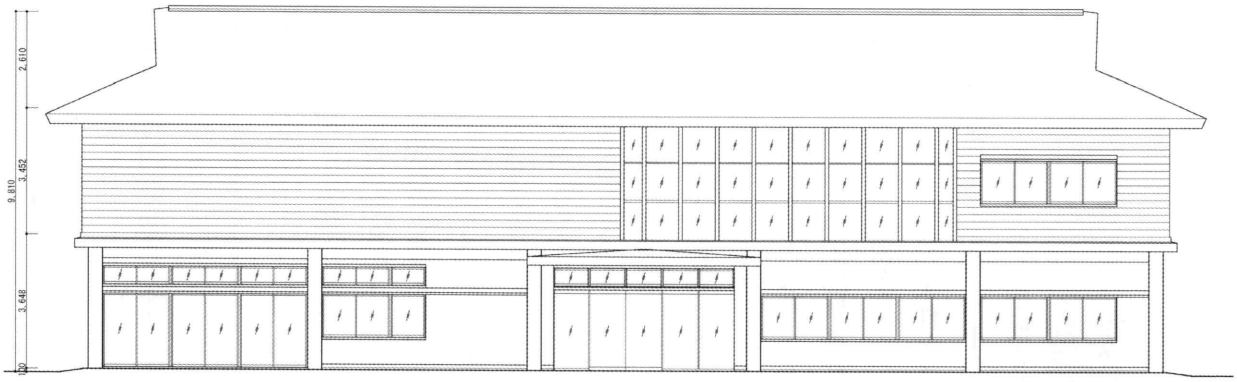
二階左半分は講堂となっています。奥行約十五m、幅約十mの大空間で、大規模な講演会や各種会合が可能です。椅子・机収納も十分あり、床空間を広く使うこともでき、様々な用途に利用できます。

一階同様、洋式の御手洗があります。

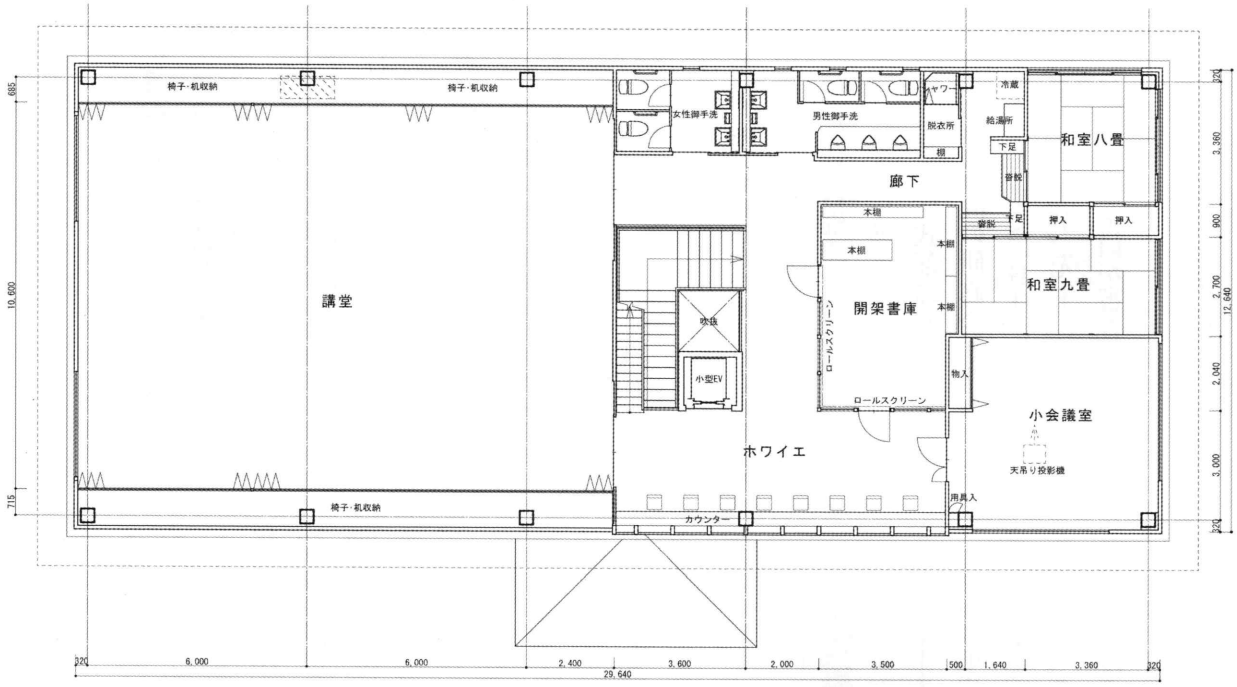
◆屋根裏その他収納

二階から裏方用の階段を上がると広い屋根裏収納庫があります。そのほか、一階には事業部収納、各室に押入や収納があり、必要な物品を納めることができ、すっきりとした室空間を実現しています。

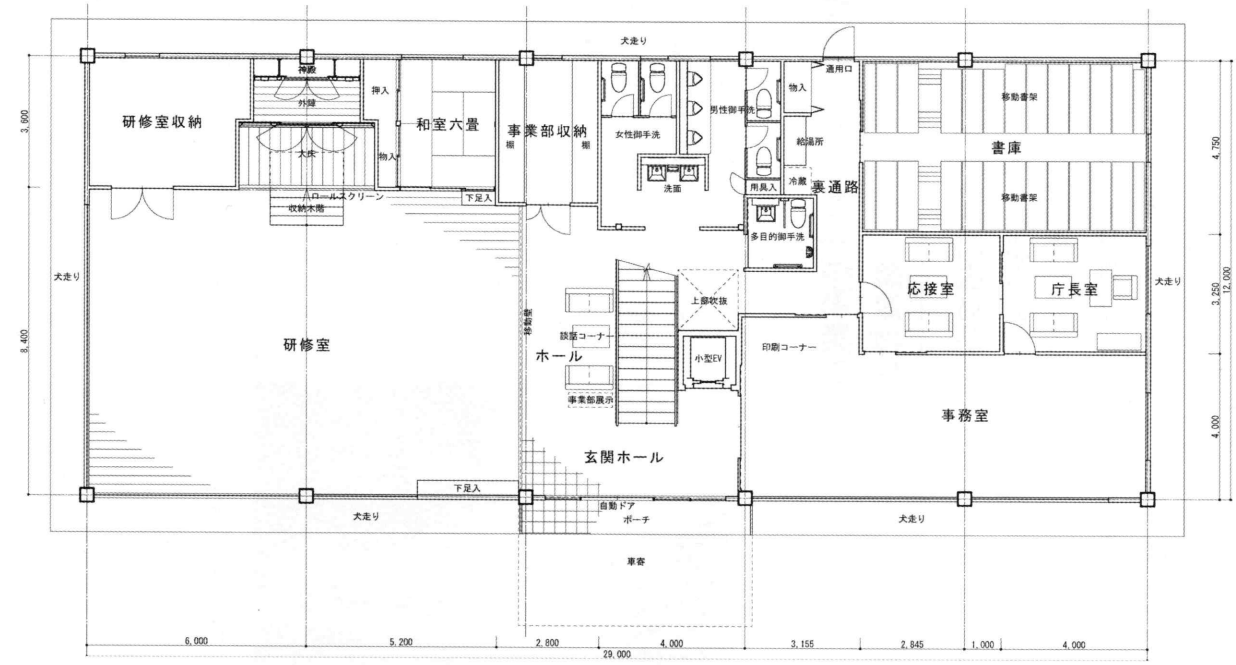
将来の利用に適った新庁舎となります。皆様のご協力をお願いします。



広島県神社庁新庁舎　正面立面図



広島県神社庁新庁舎　二階平面図



広島県神社庁新庁舎　一階平面図

第六十八回 広島県神社関係者大会（令和六年八月二十八日）報告

「祭祀舞研修会十五周年記念事業「朝日舞」奉奏して」

広島護國神社　権禰宜　内藤善文

令和六年八月二十八日、第六十八回広島県神社関係者大会において、祭祀舞研修会十五周年事業として「朝日舞」を奉奏する機会を得た。

祭祀舞とは、昭和二十五年に神社本庁が制定した、祭祀に於いて舞われるもので、朝日舞と豊栄舞の二種がある。

神社での舞といえば、一般的には巫女舞が広く知られており、氏神様のお祭りでは、地域の子供たちがその役を担っているところも多いが、この朝日舞は宮司自ら舞うのを本旨としているところから、宮司舞ともいわれている。

広島県神社庁での祭祀舞（朝日舞）研修会は、平成十九年から始まり、八月と三月の年二回開催されている。今回、令和六年に十五周年を迎えたのを機に、これまでの研修の成果を関係者に披露する運びとなった。

十五周年事業の奉奏に向けて、祭祀委員会祭祀舞部横田欣子講師・澁谷武宏講師が中心となり、令和五年末から舞人を募り、令和六年三月から八月の本番までに、広島県神社庁、広島護國神社、吉備津神社を会場に、月に二回から三回の研修を重ねた。また、本番の舞台に立つにあたり、一定の技量に達していることが条件とされ、その審査に宮内庁式部職楽部楽長補の東儀季祥先生を招聘し、七月十四・十五日と二日間の研修会が開催された。舞の手振りや型を指摘される事も多く、それまでに身体に染み付いた悪い癖が抜けずに、何度も修正される場面もあったが、先生の熱心な指導と、受講者の真摯な取り組みの甲斐あって、受講した全員が審査に合格することができた。

その後、八月七日には、國學院大學助教の山口祐樹先生を招聘し、邇保姫神社氏子会館にて、舞の型を崩さない装束の著装法を学ぶ高倉流衣紋道の研修会も開催された。通常の著装も自己流になってしまっている部分がある中で、改めて基礎基本を復習することができ、さらに舞を舞う上で動きやすい著装を学べたことは貴重な体験となった。

本番は、正服姿の神職が十一名並んだことで重みと華やかさも加わり、一層気持ちも昂ったが、曲が始まると集中し、落ち着いて舞うことができたように思う。今後も、この研修で身に着けた朝日舞の研鑽を怠ることなく、また次につなげられるよう努力を重ねていきたい。

長期に亘る準備と研修を経て、広島県神社庁やご指導を仰いだ講師や、講師補の先生方を始め、多くの方々の支えにより、これまでの研修の集大成を披露することが出来た。今回ご覧いただいた関係者の皆様にも、是非ご自身の奉仕する神社で朝日舞を奉納して頂ければと思う。

「祭祀舞研修会十五周年記念事業「朝日舞」奉奏して」

饒津神社　権禰宜　浅野薫

令和六年八月二十八日、第六十八回広島県神社関係者大会が開催されました。第一部の式典に続き、「朝日舞講習会」十五周年記念として朝日舞の奉奏がありました。

数年前から神社庁で行われる朝日舞の研修に参加するようになった私は、すっかり朝日舞の虜になっていました。そんな折、祭祀舞講師である横田欣子先生に今回の舞姫のお話を頂き、私は迷いなく挑戦することを決めました。関係者大会で奉奏する為には、決められた回数以上の研修に参加することと、朝日舞を作曲された東儀和太郎先生の孫にあたられる東儀季祥

先生の審査に合格することが必要でした。

そうして始まった朝日舞の研修は横田先生のお人柄もあり、毎度楽しく学ぶことができました。また、吉備津神社、広島護國神社、邇保姫神社、それぞれの宮司様、職員の方々、ご家族、関係者の方々のご協力により研修会場に使わせて頂き、皆様のご協力あっての研修となりました。

そして東儀先生に直接指導して頂く機会にも恵まれました。その際には他県の祭祀舞講師の先生も参加されており、思わぬご縁も頂きました。ご縁といえば、舞に特化した著装を國學院大學助教の山口祐樹先生に教えて頂くこともできました。全て身に余る経験をさせて頂きました。

大会当日は衣紋者として助けてくださった方々もおられ、こんなに沢山の方々のお力をお借りしてこの大会で舞えるのだと胸がいっぱいになりました。舞台上では精一杯、神様や関わってくださった皆様に感謝の気持ちを持ち、心を込めて舞うことができました。

このような貴重な経験をさせて頂き心から感謝しています。本当にありがとうございました。この経験を活かしてこれからも神職としても舞姫としても頑張っていこうと思います。まだまだ至らない点も多々ありますが、これからもどうぞよろしくお願い致します。

「関係者大会清興で神楽を上演して」

有田神楽団　小田真矢（有田八幡神社　権禰宜）

八月二十八日に行われました第六十八回広島県神社関係者大会において、清興とし有田神楽団が神楽上演の機会をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

私は、神職として有田八幡神社に奉仕させていただく傍ら、当神社の氏子を中心に結成された有田神楽団の団員でもあります。神楽は幼いころから身近なもので、神楽を通じて古事記に親しんできました。秋季例大祭の前夜祭には、秋の実り、神様への感謝を捧げる神祭りとし、夜通し神楽を奉納しております。

有田神楽団の創始は、戦国時代末期ごろに『荒平の舞』という詞帳を基に、神楽を奉納していたという記録が、宮司家に伝わる古文書の奥書に残されており、今日まで伝承されています。昭和二十九年には、儀式舞『神降し』、『八岐大蛇』、そして、この度上演しました『天の岩戸』が、広島県無形民俗文化財の指定を受け、本年は指定から七十年の年を迎えることができました。

この度、上演に当たり選んだ演目の『天の岩戸』は、神楽舞の原点でもあり、大切にしている舞の一つですが、今や観光資源となりつつある神楽を観ていると、『本来の神楽から離れていくのではないか』と危惧することもあります。しかし、この度の広島県神社関係者大会において、神社関係者および神社総代の皆様の前で披露させていただいたことで、神職としても、先代達の思いを伝承する団員としても、神楽本来の意味を考えながら舞うことができたように思います。

今後も神事の中の神楽舞として、広島県無形民俗文化財指定一〇〇年を目指し、団員と共に保存継承のため、守り続けられた舞を舞い続けてまいりたいと思います。最後に、広島県神社関係者大会清興に向けてご尽力いただきました皆様に感謝し、ご報告いたします。

シリーズ

神社の社紋について⑧

庁報編集委員会

梅紋【その1】

◆はじめに（梅紋とは）

「梅」は、奈良時代中期ごろ大陸から渡来し、貴族の間で愛好されました。『万葉集』では、「萩」に次いで二番目に多く詠まれた植物です。ウメの古名は好文木と呼ばれ、これは「文を好めば則ち花開き、額を廃すれば則ち梅開かず」という故事に因みます。

梅の紋様は、奈良時代から用いられていますが、写実的に表現された「梅花紋」、幾何学的に図案化された「梅鉢紋」があります。鉢というのは、花の真ん中の雄しべが、太鼓を叩くバチのように見えることから名づけられました。

日本に古くからある梅の花は、いつの世も人々に愛されてきました。学問の神様と呼ばれる菅原道真公も、その一人です。菅原道真公は梅を非常に愛し、庭にある梅の木をとても大切にしていたと言われています。右大臣という地位にまで上り詰めた道真公は人生を謳歌していましたが、道真公は左遷され、九州の「大宰府」に追いやられてしまいます。都を離れなければならなくなった道真公は、大切にしていた梅の木を想ってこう読みました。

「東風吹かば　にほひよこせよ梅の花
主なしとして　春を忘るな」

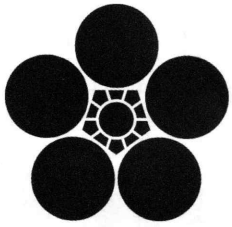
意味は「東の風が吹いたら、私のところにその香りを届けて下さい。私がいなくなっても、春を忘れずに花を咲かせてください」というもの。自分がいなくなったあとの梅の木が、咲かなくなってしまわないか…香りだけでも風に乗ってきてくれたら、という切実な気持ちが表れています。梅が好きな道真公のことを思ってか、道真公を表す紋として「梅紋」が使用されるようになったのです。

道真公を祀った「太宰府天満宮」にも「梅花紋」が使用されており、道真公が好きだった梅がたくさん植えられ、訪れる人に花の美しさと道真公の心を伝えています。

道真公を祀った神社は全国にありますが、後に菅原道真公が学問の神として崇められると、学問を象徴する花となりました。

梅紋は、「巴紋」「桐紋」「菊紋」に次いで全国四番目に多い紋です。【出典：『神紋総覧』旧社格県府社以上】その理由として、天神社の神（菅原道真公）は我々の祖先と近き世に同居していたことが「天神」の魅力であり、「天神信仰」は中世末から近世初頭にかけて、新しく開発された村の氏神社として奉斎されたことによります。

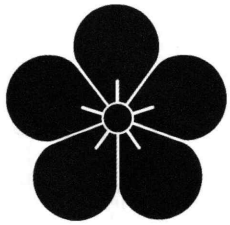
◆代表的な梅紋



梅鉢紋

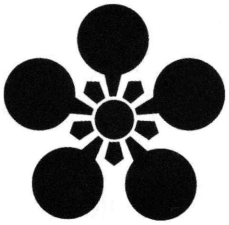
梅鉢紋とは、花弁をそれぞれ独立した円で表現して梅の花を描いています。紋の中央（花のおしべのようなもの）が太鼓をたたくときのバチのように見えたことから、「鉢」の名が付きました。梅鉢紋は、五つの円を梅の花弁に見立てた紋で、忍耐力や生命力、子孫繁栄の象徴とされています。

全国　梅・梅鉢紋の分布
（旧社格県府社以上）



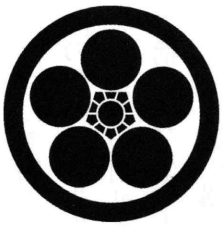
梅花紋

古くから使われていたのは「梅花紋」であると言われています。しかし、江戸時代になるとだんだん梅鉢紋を使う人が増えていったようです。



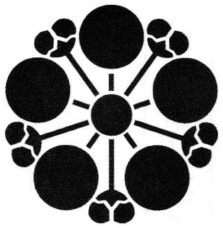
加賀梅鉢紋

加賀梅鉢紋とは、「梅鉢紋」と比べて、中央のおしべが長く飛び出たような形になっています。この紋は、豊臣秀吉の家臣で有名な前田利家が使用していたことでも知られています。前田利家は、秀吉から「五七の桐」など格式高い家紋を下賜されていましたが、使用したのはこの「加賀梅鉢紋」と「剣梅鉢紋」でした。現在、金沢を中心として北陸に梅紋が多いのは、前田家の影響が大きいからです。



丸に梅鉢紋

丸に梅鉢紋とは、梅鉢紋を、丸で囲った紋です。梅の花のまわりに、また花がついているように見える家紋で、一層華やかさが増しています。



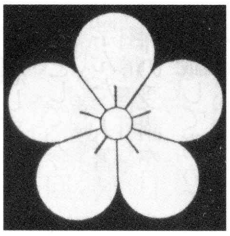
花付き梅鉢

花付き梅鉢紋とは、梅の花のまわりに、また花がついているように見える紋です。

◆梅紋の主要神社

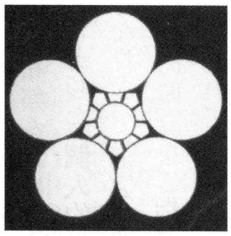
福岡・大宰府天満宮【梅花紋】

太宰府天満宮は、天神様である菅原道真公をお祀りしている神社です。**「学問・至誠・厄除けの神様」**がいらっしゃるとして多くの観光客が訪れます。梅紋は天神信仰と深い関わりがあるとされており、福岡県をはじめとする九州地方・近畿地方で特に見られる紋です。太宰府天満宮では「梅の花」が神紋に定められており、敷地内のあちこちで目にすることができます。また、太宰府天満宮の敷地内には「梅の木」が植えられ、春になると満開の花と合わせて見ることができ、お花見の名所となっています。



東京・湯島天満宮【梅鉢紋】

東京都文京区にある湯島天満宮は**「学問の神様」**として有名な神社です。こちらでも菅原道真公が祀られ、現在でも受験生など学問の祈願をする人々に人気の神社です。湯島天満宮では**「梅鉢」**を神紋にしており、神社内に梅の木があるのはもちろんのこと、お守りなどにも梅鉢紋が使われています。梅鉢紋は梅花紋に比べ花弁が離れたデザインで、少し幾何学的に表現されたものですが、他の紋とあわせるなどして種類豊富で人気の紋です。

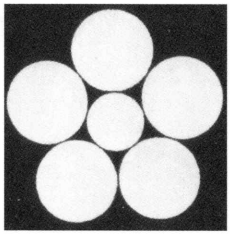


京都・北野天満宮【星梅鉢紋】

北野天満宮は日本全国の天満宮の総本社で、こちらでも菅原道真公を祀っています。修学旅行で京都に行く学生や、学業成就を願う人々が訪れる京都の有名な神社です。

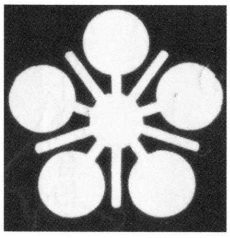
境内には、五十種類・一五〇〇本の梅が植えられているので、梅が花を咲かせる春の時期にはとても美しい情景が見られます。北野天満宮の神紋には**「星梅鉢」**を使用しており、空の星と梅鉢紋を掛けたイメージです。

「星紋」という独立した紋がありますが、星は運命を司るものとして信仰されてきました。その星紋と梅紋を組み合わせてできたのが「星梅鉢紋」なのです。



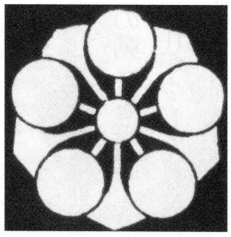
東京・亀戸天神社【変り剣梅紋】

東京都江東区亀戸にある神社です。天満大神こと菅原道真公を祀っています。通称は亀戸天神、亀戸天満宮または東宰府天満宮と呼ばれています。



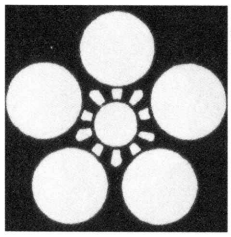
石川・尾山神社【剣梅鉢紋】

石川県金沢市にある神社で、主祭神は加賀藩の藩祖前田利家公と妻の芳春院（まつ）が祀られています。北陸地方に梅紋が多い理由として、前田家とのかかわりが深く影響しています。



石川・小浜神社【加賀梅鉢紋】

前田家の家紋は、「加賀梅鉢紋」といわれています。加賀の前田氏は菅原道真公の子孫と称していたため、家紋も道真公ゆかりの「梅鉢紋」を用いたとされます。



神職専門研修会（祭式・衣紋）を受講して

府中芦品支部　吉備津神社　権禰宜　尾多賀　史章

令和六年九月七日(土)午前十時より広島県神社庁に於いて神職専門研修会に参加させていただきました。研修内容は衣紋、祭式作法で祭式講師の福場快之先生、重白将彦先生、また助教の渡部公彦先生、久保田桂子先生また飯田誠教化委員長の方々にご指導いただきました。

まず午前の講義「衣紋について」ですが、一人著装コースは福場先生に、衣紋者お方コースは重白先生にそれぞれ教室が分かれての開催になりました。吉備津神社からは私ともう一人が一人著装コースを受講しました。

内容としては講義開始から早々に各々で著装をするようにとの指示があり、受講生は少し戸惑いながらも正服・斎服の袴、単と取り分けて著装を開始していました。

私は令和六年八月二十日まで愛媛縣護國神社でご奉仕させていただいておりまして、八月二十二日付で父が奉仕している吉備津神社に奉職しました。それで愛媛でもお方に衣紋者として著装をする機会はありましたが、一人著装は一度も経験がなく最初とても手こずりました。斎服ではなく正服でやっていたという事もあったのか、袍の前側を仮にはせようにも滑って滑ってなかなか思う様な高さに合わせられないと苦戦しておりました。福場先生が袍を著装する際、最初に単の袖も纏めてたくしあげてするとやり易いと指導いただきました。鏡を見ながら先生や他の受講生から協力してもらいながら何とか一度著装することが出来ました。他の受講生も苦戦しながらも其々一度は著装していた様に見受けられました。

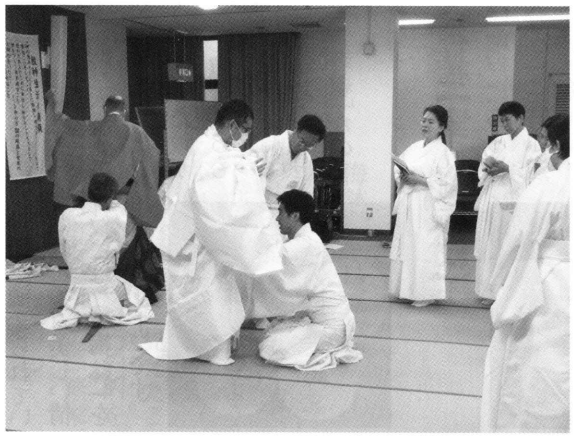
二度目の著装の途中あたりで終了時間が近づいてきたので、衣紋をほどき昼休憩に入りました。お弁当とお茶を受けて、顔見知りであろう集団で談笑しながら昼食を摂っていました。

そして午後からは祭式の講義で、私は諸祭コースに出ました。そこでは神宮大麻頒布祭を基に斎主、副斎主、大麻を受ける総代長の動きを受講生が実践しました。個人的に大麻の授受で互いに合わせての動作が少したどたどしくなりながら役を一通り終えました。それから福場先生から基本姿勢、基本動作の確認をご指導いただきました。立礼・坐礼の姿勢から、左折など口頭で言われて実践してみると右左を間違えたり足を少しく引いたりする動作を忘れていたりと基礎基本の大切さを感じました。

その後に各神社での奉幣行事のやり方やそこで使う幣帛の仕様、合拍手などの報告を話し合いながら講義が終了しました。

また、今回の神職専門研修会は土曜に開催されたという点で、神職さん其々に賛否両論あるかとは思いますが、私個人はこの時期であり社務の都合もつけやすく参加しやすかったと感じました。

総括として、今回の神職専門研修会で学んだ一人著装と祭典並びに祭式動作の受講を日々のご奉仕の中でも意識して務めて参りたいと思います。



広島県神社総代連合会研修会に参加して

天別豊姫神社総代会　会長　宮下　勇

過去にあまり経験のない猛暑が続く九月二日から三日の二日間、広島県東部の福山市を中心に、令和六年度の「広島県神社総代連合会研修会」が行われ、県内から関係者十九名が参加しました。

まず一日目は福山の名勝〝鞆の浦〟を散策後、艮神社（奥康就宮司）を正式参拝。この神社は十七年前、私の次女が神前結婚式を挙行した神社でもあり、懐かしさが半分で参拝しましたが、その後に参集殿も新しくリニューアルされていて、今にもあの時の雅楽の演奏が聞こえてきそうな気がしました。

次にお隣の福山八幡宮（吉川通泰宮司）を自由参拝。自由参拝と言いながら、今回は特別に吉川泰正禰宜が猛暑の中、境内各所で社殿の建築様式等を詳しく説明して下さいました。

その後福山八幡宮の会館で研修会が行われました。開講式の後、今回の演題「神社の運営や祭事への総代会や氏子組織のかかわり」の研修Ⅰとして艮神社の奥康就宮司が、令和四年一月に「マツコの知らない世界」という番組で当神社がテレビ放送され、後の反響のすごさをビデオを見ながら力説され、メディアの力をまざまざと見せつけられた感じがしました。それにしても放映された翌日に熊本から参拝者があった話には正直びっくり。個人的には佐々木コメンテーターが話されていた「神社参拝は〝困ったときの神頼み〟ではダメ。常日頃から敬神の心を持って神前に手を合わせましょう。」という言葉が私に言われているようで正直、ギクッとしました。

次に研修Ⅱとして、総代連合会の久川廣昭副会長が総代をつとめる福山市内から約十㎞北に入った徳田天満神社（徳永淡路宮司）の運営の実態を講演されましたが、宮司が常駐していない神社の総代会と氏子組織の関わり合いがベストの状態で運営されている感じがしました。二日目に、この天満神社を正式参拝させて頂きましたが、日頃から総代さんがしっかりと守護されており、地方の神社運営の見本のような感じがして、見習う点が多々あるなと強く感じました。

その後、私どもの天別豊姫神社（石原弘道宮司）を自由参拝。当神社も式内社で歴史的には由緒ある神社と自負していますが、拝殿・本殿が山の中腹に鎮座しています。それでも数名の方に一五〇段ある階段を上がって参拝して頂きました。その後、神社から数分で行ける所にある〝神辺本陣〟を見学。ここでは家主の菅波さんから建てられた経緯、全体の建物、さらに保有する宝物館の展示物について丁寧に説明して頂きました。

その後、昼食は〝おか星〟という半田舎料理店で色々な創作料理を堪能しました。ちなみにここのオーナー&シェフは深安支部の倉神社の岡田順宮司が夫婦で切り盛りされておられました。

さて昨年の宮島と同様、今年も盛りだくさんの研修内容でしたが、決して個人の物見遊山で終わらせるのではなく、総代会のトップとしてこの研修内容を仲間に伝え、そして仲間と共に自分の地域の神社を守り、文化を継承していかなければならない事を改めて心に誓う良い研修会となりました。また、この研修会で親しく談笑できる総代さんが沢山出来ました。大切にしていきます。

支部だより

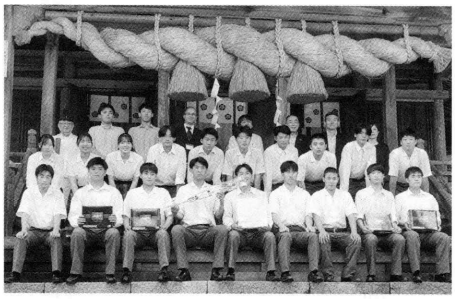
安芸高田支部
「吉田高校硬式野球部必勝祈願」

今年の第一〇六回全国高等学校野球選手権広島大会を前に、吉田高等学校硬式野球部必勝祈願祭が、六月二十八日(金)郡山城の麓、毛利元就ゆかりの安芸高田市吉田町鎮座の清神社(波多野公一宮司)で執り行われた。

早稲田浩太郎教頭、増田浩汰監督、高原蒼主将らが参列した。波多野宮司の必勝祈願の祝詞に続き、監督、選手や学校関係者、後援会、同窓会役員らが玉串を奉奠し必勝を祈願した。神事後、清神社から必勝箸が、後援会から元就の「三矢の訓え」にちなんだ三本の矢と硬式ボールが勝利を祈念し選手に手渡された。

今年は一年生七名が加わり選手・マネージャーの十九名で夏の選手権広島大会に臨む。チーム全体としていい雰囲気が維持されていることに加え、近年、県内外への遠征や、対外試合数が増え、多くの試合数をこなしており、試合成績にも大きく反映すると期待されている。初戦は七月七日三原高校と対戦した。三点の先制を許したもののエースが好投し七対三で勝利、二年ぶりに初戦を突破した。

(波多野公一　通信員)



安芸高田支部
「毛利元就公没後四百五十三年墓前祭」

令和六年七月十六日、戦国時代の武将毛利元就公墓前祭を元就公ゆかりの郡山山麓鎮座清神社(波多野公一宮司)により執り行った。

波多野宮司が祝詞奏上、毛利奉賛会田丸道男会長を始め毛利家毛利元敦氏、山口市豊栄神社宮司、洞春寺住職、安芸高田市長、防府市長、三原市文化課長、北広島町長らが玉串を奉奠した。

全国各地から国史跡元就公墓所、郡山城跡や清神社など多くの人が訪れているが、近年、度重なる豪雨や豪雪等により土砂崩壊、倒木等で国史跡郡山城跡などが大きな被害を受けている。墓前祭を前にした六月下旬、元就公墓所斜面の枯れし、元就公墓所内の江戸時代奉献の灯籠を含め四基が全壊するという被害があった。

今年の墓前祭は、万が一の倒木事故を考え、参拝者の安全を優先し、毛利一族墓所境内地で執り行った。市は枯れ木伐採など、早急に対策を講じることとしているが、主催した毛利奉賛会は、長い歴史ある元就公墓前祭と、墓所の保存など、これからも後世に引継ぐべく取組んでいくとしている。

(波多野公一　通信員)

安芸高田支部
「祇園祭と奉納神楽」

七月十三日(土)毛利元就ゆかりの安芸高田市吉田町鎮座の清神社(波多野公一宮司)で夏祭り祇園祭が執り行われた。波多野宮司が祝詞を奏上、総代や氏子らが玉串を奉奠した。

古くから吉田の「おぎょんさん」と呼ばれ、以前は境内や参道に多くの露店が並び、参詣客でにぎわった。今では露店もなく、また、時代が移り、知る人も少なくなったが、この日は祭神の素戔嗚尊が胡瓜畑に隠れ、難を逃れたことから胡瓜を食べない習慣があった。

境内の玉垣に巡らされた木柵に、清神社の社紋が映えるいくつもの大小の提灯が灯され、本殿にも大提灯がたくさん点灯された。毎年、神楽奉納は天候が大きく影響し、延期となったり、場合によれば中止したこともある。荒天となった場合、延期も想定していたが、幸い梅雨の間の晴れとなった。郡山子ども神楽団により「元就公」、吉田神楽団により「塵倫」、「紅葉狩り」が奉納され、一年ぶりの神楽奉納をこの日のために帰省した家族など、多くの氏子らが楽しんだ。

(波多野公一　通信員)

安芸高田支部
「サンフレッチェ広島レジーナ必勝祈願」

サッカー女子プロリーグのサンフレッチェ広島レジーナは、今季の「二〇二四―二五WEリーグ」開幕を前に八月二十七日、毛利元就ゆかりの安芸高田市吉田町鎮座の清神社（波多野公一宮司）で必勝祈願祭を行った。

監督、選手とチームスタッフなど三十四名が参拝した。神事に先立ち、選手を代表し小川愛、上野真実両選手が絵馬を奉納、栗原明夫権禰宜の必勝祈願の祝詞に続き、定本清路レジーナ事業本部長、吉田恵監督、今季の主将を務める地元広島市出身の佐山桃子選手が玉串を奉奠し、リーグ戦での健闘、必勝を祈願した。吉田監督が、甲冑姿の毛利元就役からチームの象徴でもある「三矢の訓え」にちなんだ三本の矢を受取り、必勝祈願祭を無事終了した。

チームはこの夏、シーズンに備えて鹿児島県でトレーニングキャンプを行っており、今季は昨シーズン以上の活躍が期待されている。

九月十四日の初戦はノエビアスタジアム神戸でINAC神戸レオネッサと、同二十一日にはホームのエディオンピースウイング広島でマイナビ仙台レディースと対戦した。

（波多野公一　通信員）

安芸高田支部
「鳴石山神社 五年ぶりに神輿渡御、神儀舞復活」

安芸高田市向原町鎮座の鳴石山神社（青山隆洋宮司）で秋季例大祭が九月七日、八日に執り行われた。コロナ禍で中断していた神輿渡御と神儀舞が、今年五年ぶりに復活した。

秋季例大祭では青山宮司が祝詞を奏上、祭礼の中で舞迫当番区の小学校女子児童が太鼓に合わせて巫女舞を奉納、また四百年以上も前の永禄の頃から始まったとされている神輿渡御と露祓い、悪魔祓いの神儀舞が行われた。

神輿渡御では神輿に続き供奉者が捧げる三方に載せた神饌とともに、社前から境内を巡り、正面参道の石段を経て社前に還り、笛、太鼓の奏楽に合わせた露祓いの黒鬼と悪魔祓いの赤鬼が「庭入りの舞」をしつつ神楽殿に昇り、露祓い、悪魔祓いの順に神儀舞を行った。

神儀舞は古老より若者へと伝授され、現在に及んでいるが、太鼓・鉦・笛とともに三か月前頃から練習を重ね、五年ぶりの神事に備えてきた。神儀舞は、前夜祭と神輿渡御の後の二回奉納された。神事の後に参拝者に紅白餅や菓子が配られ、原田神楽団による神楽も奉納された。

（波多野公一　通信員）

安芸高田支部
「宇佐神社 五年ぶりに神儀舞復活」

毛利元就の父弘元の祈願所で、弘元が山県郡大朝村八幡神社を勧請したと伝えられている安芸高田市吉田町多治比鎮座の宇佐神社（波多野公一宮司）で秋季例祭が九月二十二日に執り行われた。波多野宮司が祝詞を奏上、総代や氏子らが玉串を奉奠した。

祭礼は多治比三地区の氏子が当屋制により交代であたっている。今年は川原地区が務め、神儀舞が奉納された。笛、太鼓、手打鉦により舞楽を奏し、祭神である猿田彦神が進み出て武威を告げ、猿田彦神と進み出た獅子の戦いが行なわれる。獅子は退治されて、猿田彦神の喜びの舞で舞い納められた。楽や猿田彦、獅子などは三地区が担ったが、神儀舞四年間の中止による空白を埋めるため、毎週土曜日の夜練習を重ねてきた。

コロナ禍以降、安芸高田市内の神社では御幸の神事、神儀舞奉納など自粛が相次いだが、昨年以降、復活の傾向が顕著となった。伝統的地域文化の一面もあり、伝承の存続が危惧されていたが、今年は久しぶりの神儀舞奉納で、子ども連れの家族など多くの参拝があり、明るい話題となった。

（波多野公一　通信員）

三次支部
「神職物故者慰霊祭を斎行」

去る令和六年九月二十六日に三次市三和町に鎮座します大力谷八幡神社（小畠直樹宮司）にて「第十一回広島県神社庁三次支部神職物故者慰霊祭」を執り行いました。三次支部では、五年ごとに亡くなられた先輩神職の御霊を偲び、物故者慰霊祭を行っております。

当日は天候にも恵まれ、ご家族やご親族、支部内の神職、神社関係者が参列し、厳かな雰囲気の中、祭員四名にて斎行いたしました。御霊を偲び、日々の感謝を申し上げ、これからも見守ってくださるようにお願い申し上げ、お一人ずつ玉串をお供えいただき、ご拝礼をしていただきました。慰霊祭終了後には直会も行い、在りし日の思い出などを語らい、和やかな時間を過ごし、解散となりました。

今の私たちがあるのも、先人たちの努力の上に成り立っており、感謝の気持ちを忘れず、今後も精進してまいらなければと改めて感じた日となりました。

（小畠直樹　通信員）

甲奴支部
「矢野温泉『あやめ』の復活を」

上下町矢野地区の温泉保養施設・矢野温泉「あやめ」は、平成二十八年に休館している。その敷地内に平成二十七年十一月八日に温泉神社が建てられた。当時、（有）こま会長の北吉孝一郎氏が「これまでの感謝と地域の安全を祈りたい」と建てられ、奥山哲治宮司を迎え、御祭神として罔象女大神・天之水分大神・国の御分大神を勧請された。

毎年温泉神社のお祭りを執り行っている。今年は七月二十四日に執り行われた。温泉神社を信仰される崇敬者、上下町の「たれゆえ草の会」の方々が参拝された。直会は上下町松崎にある会長の別荘で行われた。参加者は、「できれば、矢野温泉を復活させて頂きたい。」「皆で協力して頑張りましょう。」と決意を新たにした。上下町唯一の温泉保養施設・矢野温泉の復活を願う。

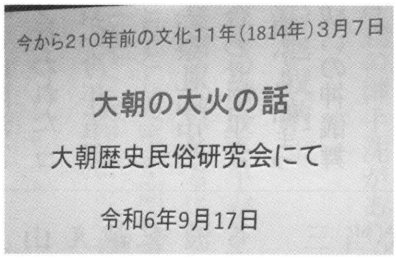
（田中律子　通信員）

山県東支部
「大朝の大火の話」

去る九月十七日（火）に大朝地域づくりセンターにおいて、講師の金田道紀北広島町まちづくりセンター長が講演された。

江戸時代に大朝の町筋に大きな火災が何度かあり、その一つに文化十一年（一八一四）三月の大火がある。今から二百十年も昔の事で、火事に弱い日本の家居、そして消火方法など考えた時、一度火災が起これば大火となるのは当然と言えよう。火元は現在の東横町で、当時一般の家居は勿論神社仏閣に至るまでが茅葺き屋根で、春の空気が乾燥している季節でもあり、加えて強風の日であったため、火災が発生した午後二時頃から三時間ばかりの間に、民家合わせて百四十軒、棟数にして五百有余が灰燼となった。この大火以後も大火事があったようだが、年代は不詳。その後から瓦屋根に替えたと言う。

（石橋正敏　通信員）



尾道御調支部
「提灯づくり」

尾道では大正八年創業の提灯店が今も手描きの提灯を作っています。百年以上前から、飲食店や神社仏閣の献灯など数多くの提灯を作り、「提灯の灯り」を掲げた想いの元に人が集まり、街がにぎわうのを支えてきました。

対岸の向島でも、毎年例祭に掲げる提灯を神社の境内で作っています。今年も尾道の提灯店「民藝創作提灯　山さき」が提灯づくりワークショップを尾道・むかいしま嚴島神社の境内にて開催されました。氏子さん達が筆を使って思い思いの絵を提灯に描き、ご奉納下さいます。

例祭にて御神前に掲げられた提灯の明かりは、御神威の発揚を受け御神徳の安らぎをもたらしてくださいます。例祭が終わると奉納された提灯は氏子さん達がそれぞれご自宅にお持ち帰りになり、安らぎの御神徳を蒙ります。

神社は日本の伝統文化の継承に重要な役割を担っています。四季折々の伝統的な行事とともに、日本の伝統工芸の粋を後世に伝えていくことも大切です。

（郡山龍　通信員）

支部だより

府中芦品支部
「備後府中 南宮神社で指定文化財の現地説明会」

府中市栗柄町の南宮神社（皿海宏則宮司）では、『ここがすごいぞ！南宮神社！現地見学会』と銘打って、府中市指定の重要文化財の南宮神社本殿・鐘撞堂などの建築と彫刻について、広島大学名誉教授 三浦正幸先生を講師に迎え、十月二十日午後二時より、南宮神社において行われた。現地見学会は、主催者である府中市教育委員会の開会行事の後、すぐさま三浦先生の解説にはいった。参加者は、約一〇〇人で、本殿内部の解説は二班に分かれて行うこととなった。

南宮神社の本殿は、桁行五間（一一・六六m）・梁間三間（六・七八m）、と規模も大きく、入母屋造、千鳥破風附、向拝、軒唐破風附、檜皮葺（当初）で十七世紀中期の建造物である。まさに、隣町の備後吉備津神社本殿をそのまま縮小したものとなっている。

三浦先生は、南宮神社本殿の特徴を、備中吉備津神社本殿（国宝）・備後吉備津神社本殿（国重文）と比較しながら、仮にこの本殿が他国にあれば、一宮級のものであることを強調され、今後の保存と活用について、地域の盛り上がりを期待された。

ちなみに、当社神像は平成二十九年九月十五日に『木造神像（十一軀）・木造随身立像（四軀）』として、国指定重要文化財（彫刻）となっている。

（尾多賀晴悟　通信員）

世羅支部
「祭式及び衣紋研修会」

世羅支部（林幸和支部長）神職は現在十八名ですが神社庁での研修会は会場が遠い事や日程の都合が合わないなどの理由でほとんど参加していない状況です。この度、支部員の参加日程を調整し、六月十九日（水）世羅町西大田自治会館において、八名の参加者を頂き廣瀬神社宮司の渡部公彦先生を講師に迎え祭式及び衣紋の一日研修会を開催しました。

日頃の実際の一人祭典の要領や神輿の祭式など支部員同士のなかでもいろいろなやり方があり、新たな発見も沢山あって充実した終始和やかな研修会となりました。

（竹廣浩二　通信員）

編集後記

あけましておめでとうございます。発刊に際しましてご協力いただきました皆様方に対し厚くお礼申し上げます。今年は巳年、新しい挑戦や変化に対して前向きな姿勢を示す年といわれています。

皆様にとりましても良い挑戦、良い変化がありますように願っています。

庁報編集委員一同

◆表紙写真提供：尾道御調支部 浮田裕人

支部だより

佐伯大竹支部
「速谷神社創建一八〇〇年奉祝奉幣祭」

速谷神社（櫻井建弥宮司）は、平安初期の文献によれば、第十三代成務天皇の御代に安芸国造（あきのくにのみやつこ）を賜ったとあり、安芸建国の祖神を祀る千八百年を越える古社である。また「国幣中社」に列格して令和六年は百年の節目に当ることから、畏くも天皇陛下より御幣帛が下賜され、十月十二日に「創建千八百年奉祝奉幣祭」が斎行された。

当日は、神社本庁より献幣使・吉川通泰氏が参向。氏子崇敬者や神社関係者ら約八十人が参列する中、櫻井宮司により御幣帛が神前に奉られた。祭典後、会場を広島市内のホテルに移し祝賀会（直会）が開催された。

夕刻からは神楽殿において奉祝神楽が舞われ、式年祭でしか舞われない「莫莚」や「天蓋」など貴重な神楽も奉納された。

同社では、創建千八百年を記念して令和三年から一の鳥居や儀式殿、玉垣などの建替や改修などの境内整備が行われてきた。櫻井宮司は、「今後とも多くの人の心の拠り所となる神社を目指していきたい」と話している。

（瀬戸一樹　通信員）

福山支部
「秋の例大祭の無事の斎了に感謝」

去る令和六年二月に塩崎神社（神原勇気宮司）の御社殿が火災にて焼失するという出来事がありました。御社殿は焼失しましたが、幸い御神体は無事に仮宮（当神社参集殿）にご奉安することができ、氏神さまのご神徳をいただくため、また地域安寧の御守護に感謝申し上げるために、このような状況下でも、秋の例大祭の斎行を切に願っていました。

前夜祭では、地域の小中学生から選ばれた舞姫による「浦安の舞」を奉納して頂きましたが、子供達も心より復興を願ってくれており、まことの心をもって稽古に励んでくれました。

神原宮司は、「この度の火災では皆様には大変ご心配をおかけいたしまして心よりお詫び申し上げます。この度、例大祭が無事に執り行うことができました事を神さまも喜んで下さったのではないかと思います。総代様、氏子崇敬者の皆様、地域の皆様には多大なるご協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。これから御社殿の再建にむけて進んでいく勇気をいただきました。」と話していました。

（神原勇気　通信員）